

博士学位論文審査報告書

Summary of Doctoral Thesis and Report of Examination

研究科長 殿

下記のとおり、審査結果を報告します。

To the Dean:

We report the result of Examination for the Doctoral Thesis below.

学籍番号 Student I.D. No.: 4005 S 023-5学生氏名 Name: PEI-CHUN HAN和文題名 Title in Japanese: 再構成されるハイブリディティと揺れ動くアイデンティティ—現代日本における台湾人ディアスポラの研究英文題名 Title in English: RECONSTRUCTING HYBRIDITY AND NEGOTIATING IDENTITY—
THE TAIWANESE DIASPORA IN CONTEMPORARY JAPAN

記

1. 口述試験参加教員 Faculty Members Involved in Oral Examination

① 審査委員会主査 Chief Referee of the Screening Committee

氏名 Name: 天児慧 印所属 Affiliated Institution: アジア太平洋研究科資格 Status: 教授

博士学位名・取得大学名: Ph.D. Title Earned・Name of Institution

社会学博士 一橋大学

② 副査 (審査委員 1) Deputy Advisor (Member of Screening Committee 1)

氏名 Name: 小笠原欣幸 印所属 Affiliated Institution: 東京外国語大学資格 Status: 准教授

博士学位名・取得大学名: Ph.D. Title Earned・Name of Institution

社会学博士 一橋大学

③ 審査委員 2 Member of Screening Committee 2

氏名 Name: ファーラー劉グラシア 印所属 Affiliated Institution: アジア太平洋研究科資格 Status: 准教授

博士学位名・取得大学名: Ph.D. Title Earned・Name of Institution

社会学博士 シカゴ大学

④ 審査委員 3 Member of Screening Committee 3

氏名 Name: 阿古智子 印所属 Affiliated Institution: 国際学術院国際教養学部資格 Status: 准教授

博士学位名・取得大学名: Ph.D. Title Earned・Name of Institution

教育学博士 香港大学2. 開催日時 Date / Time: (Y)2011 / (M) 11 / (D) 28 (Time) 3時限 ~ 4時限[時限 / Period] 1st: 9:00-10:30, 2nd: 10:40-12:10, 3rd: 13:00-14:30, 4th: 14:45-16:15, 5th: 16:30-18:00, 6th: 18:15-19:45, 7th: 20:00-21:303. 会場 Venue: 19-3104. 合否判定 Result: / Passed · 否 / Failed (該当する方に○ Circle as appropriate)

5. 添付資料 Attached document(s)

 枚 pages (和文4,000字程度、もしくは英文1,500語程度。ただし、論文題目のみは、和文・英文を併記すること)

(Approximately 4,000 characters in Japanese, or 1,500 words in English. The Doctoral Thesis title, however, must be written in both Japanese and English.)

博士論文審査報告書

学生氏名：PEI-CHUN HAN

学籍番号：4005S023-5

題名 Title 構成されるハイブリディティと揺れ動くアイデンティティ
——現代日本における台湾ディアスポラの研究——

CONSTRUCTING HYBRIDITY AND NEGOTIATING IDENTITY—
THE TAIWANESE DIASPORA IN CONTEMPORARY JAPAN

一、概要

本論文は在日台湾人を主たる対象とし、彼らのアイデンティティの形成やその構造的な特徴を明らかにすることである。問題意識としては、ポスト構造主義のアプローチと Bhabha による「中間性 (inbetween-ness)」の考え方をベースにして、「華人であり続けることと日本人になること」の中間にあり、二重の政治的イデオロギー的対立、すなわち二つの中国(大陸と台湾)の対立と、ポスト植民地主義の日本に影響されてきた台湾人ディアスポラ(Diaspora)の内なるアイデンティティをめぐる葛藤と矛盾を描き出そうとしている。

基本的な分析の作業としては、在日台湾人の移民の経験と生活パターンについて調べることにより、とりわけポスト植民地主義の文脈の下で形成された「トランスナショナルなアイデンティティ」ともいうべき特性を明らかにしているが、同時にその複雑性と混乱を描き出している。こうした側面をより鮮明に明らかにしていくために、在米台湾人や在日中国人といった地理的及び歴史的な文脈が異なる他のグループとの比較研究も行っている。

筆者は考察を通して、「ディアスポラに所属すること」を在日台湾人の新たなアイデンティティの一形態として位置付け、台湾人ディアスポラが中華文化と日本文化の中間において雑種の(ハイブリディティ)でありつつも流動的で、ベールに隠された明示的でないアイデンティティが形成されてきたことを論証している。

本論文の構成は以下のとおりである。

論文構成

ACKNOWLEDGEMENTS

ABSTRACT

CHAPTER I. BEYOND THE BOUNDARY BETWEEN SELF AND OTHER

1-1. INTRODUCTION

1-2. DEFINITIONS IN LITERATURE REVIEW

1-3. SIGNIFICANCE OF THE STUDY AND CENTRAL QUESTIONS

1-4. ORGANIZATION OF THE CHAPTERS

CHAPTER II , METHODOLOGY

2-1. INTRODUCTION

2-2. RESULTS AND QUANTITATIVE ANALYSIS

2-3. LIMITATIONS

2-4. IN-DEPTH AND FOCUS GROUP INTERVIEWS

2-5. OTHER DATA SOURCES AND DATA ANALYSIS PROCESS

CHAPTER III. HISTORICAL APPROACH: CREATING AN AMBIVALENT COLONIAL AND POST-COLONIAL LEGACY IN HISTORY

3-1. INTRODUCTION

3-2. JAPANESE COLONIAL RULE AND POSTCOLONIAL COMPLEX

3-3. CHINESE NATIONALIST DISCOURSE AND KMT NATIONALIST EDUCATION

3-4. LOCAL CONSCIOUSNESS AND NATION-STATE DISCOURSE IN TAIWAN

CHAPTER IV. QUALITATIVE APPROACH: TAIWANESE DIASPORA IN JAPAN

4-1. INTRODUCTION

4-2. HISTORY OF THE TRANSITIONAL LEGAL STATUS

4-3. BACKGROUND OF THE TAIWANESE POST-WAR COMER

4-4. LANGUAGE IDEOLOGY

4-5. FIELD: THE CONSTRUCTION SITE OF IDENTITY MAKING

4-6. IDENTIFICATION AS ETHNIC CHINESE AND/OR OVERSEAS CHINESE

4-7. IDENTIFICATION AS JAPANESE

4-8. CONFRONTATION AND DIVISION

4-9. A PARTICULAR GROUP: TAIWANESE FEMALE IMMIGRANTS

CHAPTER V. COMPARATIVE APPROACH: STUDIES ON TAIWANESE IN U.S. AND CHINESE IN JAPAN

5-1. INTRODUCTION

5-2. COMPARISON WITH TAIWANESE IN THE UNITED STATES OF AMERICA

5-3. CHINESE IMMIGRANTS IN JAPAN AND IMMIGRATION POLICY IN JAPAN

CHAPTER VI. CONCLUSION

6-1. CONCLUDING REMARKS

6-2. BELONGING TO DIASPORA AS A NEW IDENTITY CATEGORY

6-3. ISSUES FOR FUTURE RESEARCH

6-4. THEORETICAL AND POLICY IMPLICATION

APPENDIX A: INFORMANTS' DATA OF IN-DEPTH INTERVIEWS

APPENDIX B: A QUESTION GUIDE FOR THE IN-DEPTH INTERVIEWS

二、各章の説明

第1章は、導入部分で、エスニシティをはじめ本論で用いる重要概念をめぐり従来の先行研究を紹介しながら定義、説明を行い、自らの研究課題を提示している。従来同質的で単一民族的な社会であると言われてきた日本が、実は国家形成、植民地主義、移民といったチャンネルによって多民族的な社会になっていたことを指摘し、それを在日台湾人のアイデンティティ形成の構造的な背景の出発点としている。また、多くの先行研究をサーベイしながら、「エスニックアイデンティティは主観的であり、単に物質的な基準によって形成されるものではなく、自分が生まれてきた文化を知ることによって形成される」というステファン(Stephen)夫妻の研究成果を研究のベースにしている。

第2章は、マクロとミクロをめぐり分析方法について論じている。マクロ分析に関しては歴史・理論上の従来の研究成果を応用させながら論理的分析 (contextual analysis) アプローチを用いている。ミクロ分析に関してはフィールド調査、特に東京と関西地域に住む台湾住民に対する生活経験、体験的な話(narratives)などに関するインタビューを行い、それを軸に本課題の解析に取り組んだ。もっともインタビューやデータ・ソースの制約などがあり、方法的な限界性を持つ議論であることも指摘している。

第3章は、歴史的アプローチによって台湾人の多面的なアイデンティティ形成を考察している。まず、日本植民地統治時代およびポスト植民地の複雑性、また日台の文化的社会的結合が現代台湾人のアンビバレントな多面的なアイデンティティ形成の重要な要素になっていることを明らかにした。次に、植民地後の国民党の民族教育と政策が“Chinese-ness”というアイデンティティの正統性を強調し、台湾人意識の複雑性と曖昧性、方向感覚の喪失を増長させた。

第4章は、本論文のメインとも言えるもので、日本における台湾ディアスポラをフィールド調査によるインタビューや観察をベースに描き出している。書面による調査は、2007年の4月から約半年をかけて、東京都区内、千葉、埼玉、神奈川各県で実施した。該当する在日台湾人 200 人にアクセスし、64 件の回答があった。対象者は、台湾大学東京同窓会(回答者 40 名)、中華聯合總會年会(同 13 名)、佛教慈濟東京分会(5 名)、Random selections and Personal Networking (6 名) である。この調査をベースにして、第2次世界大戦前後の在日台湾人の法的地位の変化から来る意識の変化や、戦後来日台湾人の社会ネットワークのパターンなどを調査から描き出している。さらに、権威や社会的結合や権力関係に結びつく言語ビヘイビアの特徴——中国標準語、日本語、台湾語の使い分け——を描き、それが移民者のセルフ・アイデンティフィケーションの理解に重要であると指摘している。

第5章は、異なった事例研究を紹介することで、このような台湾人ディアスポラの特徴

をより明確にすることを試みている。1 つは米国という異なった環境における台湾人の意識、2 つには日本という同じ環境における大陸中国人の意識を既存の研究の中から抽出し、在日台湾人との比較を行うということである。在米台湾人は経済・社会的な活動を通して、ごく典型的な移民として、特に多層的意識を持つアジア系米国人として、ナショナルアイデンティティとしての米国人、エスニックアイデンティティとしての台湾人を保持し、かつ“*oneness and multiculturalism*”という信条を持って生きていることが読み取れる。

在日華人は今日では、いわゆる老華僑、新華僑という 2 つにグループ分けされた研究が一般的である。老華僑と異なって新華僑は学生、研修生、高等専門家が多く、日本においてトランスナショナルな生活を送っている。しかし戦争というトラウマにより、民族的階級的権威における周縁化された地位に反応するリアクティブなエスニシティの特徴が見られる。

終章では、これまでの在日台湾人アイデンティティ形成の試みが新しいアイデンティティ・カテゴリーとしてのディアスポラに属するものであることを確認した。そして多くの台湾人は、今日まさに海外での魅力的な生活、高等教育を求めてボーダレスとなっており、そのことが伝統的な台湾人アイデンティティへの挑戦となっていることを強調している。

三、評価と問題点

移民に関するこれまでの研究の主流は、ディアスポラの構成員が互いに強く団結し他の集団と大きく異なっているものとみなすものであった。しかし本論文では Lever-Tracy (2000)が指摘するような「ディアスポラが共有された記憶と普遍的な属性の上に成り立っている限りではそうであるが、時間の経過とともにそれは消え去って行き、多様な環境に適応する中で周囲に同化していく」ものでもあるという理解に立っている。本研究は現代日本における台湾系一世 *Diaspora* の文化的アイデンティティについて考察し、彼らは日本の旧植民地主義と中華ナショナリズムの遺産を受け継ぎながらも、台湾人ディアスポラは常に自らのアイデンティティを他者との間で交渉し、再構成し、再定義し、ついには一貫性のない混乱した状態にまで至ったと結論づけている。

これまでの華人研究は、このように台湾人ディアスポラの特徴に光を当てることはほとんどなかった。多くの学者は、華僑一世は中華アイデンティティを維持し続ける傾向があり、そのため特定の *ethnic niche* や *enclave* の中で存在し続けていると論じてきた。したがって本研究に見られる台湾人ディアスポラ分析は、様々な華人アイデンティティ研究の中でも新鮮で、ユニークな結論を導き出している。

また、本論文は、トランスナショナルなアイデンティティの分析のために定性的な研究手法を用い、日本に在住する台湾人に対する詳細なインタビューから基本的な情報を得ている。この作業は忍耐の要するものであった。このデータを用い、特定の文化と特定の文脈に基礎づけられた「*ethnographically-informed*」アプローチを使うことによって、在日台湾人の文化的アイデンティティに対する深い理解と考察が可能となっている。こうした手法による研究の結果は、在日台湾人が自らのアイデンティティに関し多様な視野を持っていることを明らかにしており、研究のもう 1 つの貴重なオリジナリティと言えよう。

以上のようなアカデミックな成果とオリジナリティを有している本論文であるが、幾つ

かの点で掘り下げが不十分であったり、修正が必要と思われる点も見られた。

第1に、最も重大な点はアイデンティティ形成のプロセスにおいてどのようなメカニズムが機能しているのかが十分に説明されていなかったことである。このためにはおそらく歴史的、制度的、社会経済的、文化的なコンテクストを描きながらそれらをつなぎ合わせていく、論理的で緻密な作業が求められるのであろう。もしこれが明らかにされるならば、ディアスポラの構造的な研究に重要な理論的功績を提供できたのではないだろうか。

第2に、これとの関連で、かなり多くの先行研究や研究方法に関するサーヴェイは行っているが、それらが実際のデータ分析や理論的説明に必ずしも十分に生かしきれてはいないようであった。やはりこうした多くの成果を吸収しながらも、自分なりに消化し、自分自身の分析アプローチを構築していくことを心がけていく必要があるのであろう。

第3に、多くの時間と苦勞をかけて豊富な聞き取り調査を丁寧に行っているにもかかわらず、本論文ではその内容が十分に生かされているとは言いがたく、より詳細で理論的な整理を行えば、もっと説得的な議論が展開できていたのではないかと思われる。

第4に、在米台湾人、在日中国人との比較対象を行おうとし、その着眼点は大いに評価すべきであったが、そのためのフィールドワークがなされていないために、概論的でオリジナルな説得性を欠くものとなった。また、比較研究という点では、筆者も言及しているように、在日韓国・朝鮮人のディアスポラの分析を行いこれとの比較から、本論の課題に接近してもらいたかった。これらは今後の研究課題として是非とも取り組んでもらいたいものである。

四、結論

以上のような評価と問題点を踏まえて総合的に考えるならば、上記したような幾つかの問題点と研究課題を残しながらも、本論文に関連したこれまでの多くの学術的成果を取り込み、台湾人アイデンティティをめぐるオリジナルな見方を提示することができている。またそれ自体が今後のディアスポラ研究にとって一定の貴重な問題提起となっていると判断できる。

博士論文としてのレベルから考えると、その問題設定、分析アプローチ、実証的な考察のプロセス、結論などにおいて博士学位論文の基準を十分に満たしている。論文審査委員会一致しては博士学位に値すると判断し、博士の学位授与を提案する。

2011年12月24日

博士学位申請論文審査委員会